

# 「17世紀アイヌ文化と環境に関する学際的研究」

北海道博物館・学芸員・理学博士 添田 雄二



## ■ 新たな研究がスタートしました

私達は、2019年から「巨大噴火・津波の痕跡を軸とした17世紀アイヌ文化と環境に関する学際的研究」を開始しました。この研究では、伊達市有珠地区での遺跡を発掘してアイヌの生活や文化を明らかにしつつ、古環境（巨大噴火・津波や当時北半球で数百万人が死亡したとされる小氷期）を復元して、人々がどのように対応していたかを探ることを目的としています。これは文部科学省・日本学術振興会の助成による研究で（JSPS科研費19H01352：研究代表者、添田雄二）、15名以上からなる道内外の人文学や自然科学分野の研究者で取り組んでいます。期間は2022年度までの4年間です。

## ■ 800年前から続くアイヌ文化の歴史

アイヌ文化は、13世紀頃に成立して以降、現在に至るまでの800年間に、各時代、各地域において多様な文化を展開しながら変遷してきたはずです。しかし、近代以降、アイヌの伝統文化が、北海道旧土人保護法（1899年）に象徴される日本社会への同化政策の影響で急速に変容を余儀なくされた一面があり、さらに、かつてのアイヌ民族は文字を使用しなかったため、当時の暮らしや文化を記録した資料は、主に1800年代以降の和人が残した古文書や絵画に限られます。このため、博物館や一般普及書等では、アイヌ文化が13世紀以降どのように移りかわって現代に至るのか十分に触れられないのが現状です。

したがって、アイヌ文化の歴史的変遷を明らかにするには、年代が正確に特定できる遺跡を発掘し、食生活や住まい、およびその背景にある古環境を人文学と自然科学による学際的な研究で多角的に検証しながら精度の良いデータを提示していくことが必要です。そして実は有珠の遺跡こそが、1663年の有珠山火山灰と1640年の駒ヶ岳噴火・津波痕跡との層位関係から、遺構や遺物の年代を特定できる遺跡なのです。

## ■ 「有珠」の重要性

17世紀という年代は、アイヌ文化の成立期とされる13世紀頃から現代までのほぼ中間にあたり、

歴史的変遷を考える上で極めて重要な時代です。私たちが調査している有珠のカムイタブコブ下遺跡では、住居（チセ）跡や畠跡、貝塚、墓が発見され、この地に集落が展開されていたことが明らかになっています（北海道博物館・伊達市噴火湾文化研究所2019）。昨年秋の調査でも新たな畠跡と貝塚を発見しました（写真1）。特に、チセ跡の存在は、当時の生活とその背景にある環境を探る上で必要不可欠です。このような条件を満たし毎年発掘できる遺跡は、今のところ北海道では有珠以外にありません。

## ■ 新しい手法

これまでの調査と関連分析では、現在より冬が長かったことや寒冷な環境に適応して根菜類（カブ）を栽培していた可能性、噴火・津波の規模とその影響など環境と人々との関係が明らかになってきました。これらの分析は継続しつつ、新たな調査分析も行います。

第一に、遺跡の直上を覆う1663年有珠山噴火の火碎サージ（高温・高速で山体を流下してくる火山灰とガス）の残留磁化を測定して温度を推定し、当時の噴火が人々へ与えた影響を具体的に探ります。



写真1 新たに発見した貝塚からマグロの椎骨も出土

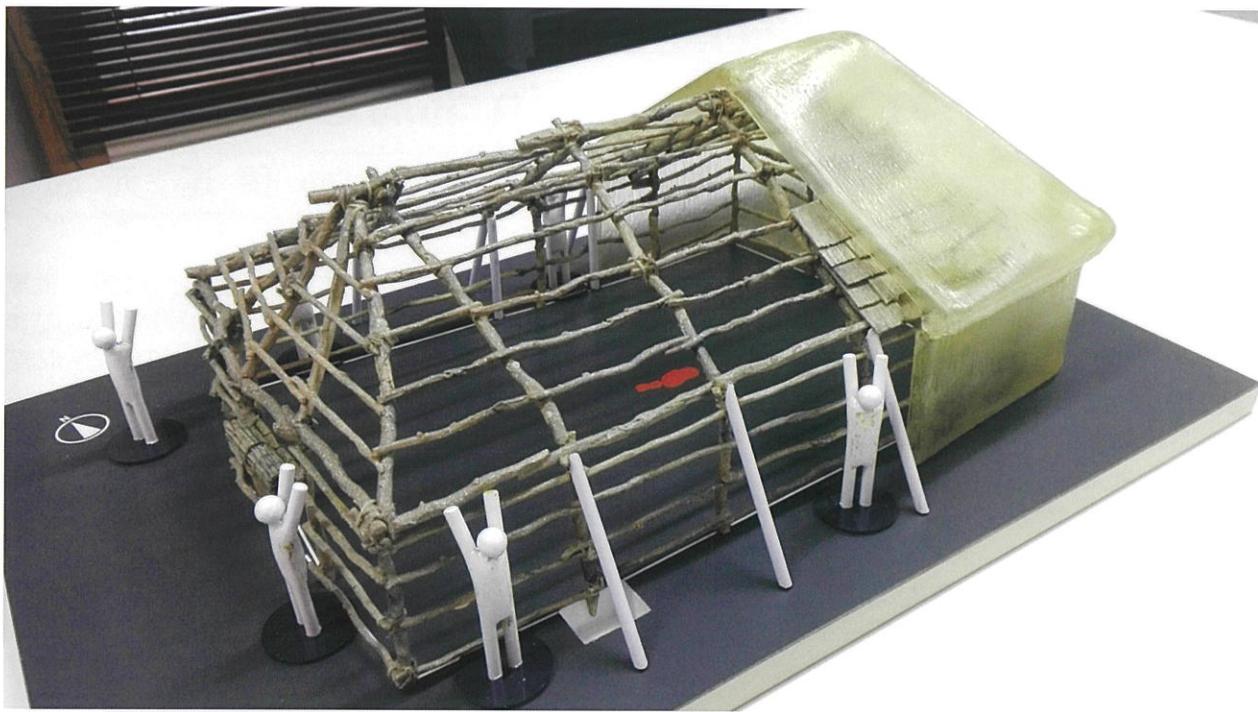


写真2 カムイタブコブ下遺跡チセの復元模型（監修：小林孝二氏）

また、有珠地区や噴火湾沿岸の遺跡から出土するラッコ骨の年代測定と同位体分析、および古代DNA分析を行います。ラッコ(千島ラッコ)は現在噴火湾に生息せず、より寒冷な千島列島で繁殖・分布しています。そこで、かつての生息域を各分析で検討し、環境およびアイヌ民族の生業との関係も探ります。

さらに、地中レーダー探査による畠跡の検出を試みます。噴火で埋没した畠跡の地中レーダー探査による検出は静岡県で報告されており、畠跡の上に火山灰が厚く堆積しているカムイタブコブ下遺跡でも検出可能と考えています。地中レーダー探査で畠遺構を確認できれば、それ以外の場所に貝塚や住居跡がある可能性があり、目的に合わせて発掘することができます。

### ■もう一つの試み

これまで私達は、発掘現場説明会、洞爺湖有珠山ジオパーク共催バスツアー、シンポジウム、新聞での連載、学会発表や報告書等で研究成果を公表してきましたが、今後はさらに幅広く十分な理解が得られるような様々な取り組みが必要と考えています。

カムイタブコブ下遺跡で発見したチセ跡からは、これまで博物館等で紹介してきたチセとは異なる姿が復元されました（写真2）。これはアイヌの建築文化の変遷を考える上で、重要な成果でした。そこで、この住居をモデルとした「体験学習用のチセ組み立てキット」を開発中で、当時のチセの特徴や建築方法、これまで博物館等で紹介してきたチセとの違いを、実際に手を動かす体験学習行事を通して深く理解してもらうのが狙いです。



写真3 本物の枝に樹脂を塗って硬化（柱として使用）

キットの材料には実際の木（枝）を使用することでリアリティを持たせます（写真3）。最終的な完成とお披露目は約2年後の予定です。

また、成果の公表には伊達アイヌ協会にも協力をいただく予定で、発掘現場の見学や行事の開催等について何度か打ち合わせをしてきました。将来的には胆振地域の他のアイヌ協会にも協力をいただくななど、アイヌ民族の方々にも研究成果を体験的に理解してもらうようなより良い方法を構築していきたいと思います。

### ■引用文献

北海道博物館・伊達市噴火湾文化研究所（2019）  
伊達市カムイタブコブ下遺跡発掘調査報告書  
—近世アイヌ文化期の集落—